

松本貞風

花三分尊徳ひとり薪背負ふ
春の日や覚えある子の靴の音
湯女の碑の若葉にこもり名も知れず
嫁に來し母は十七桐の花
原爆忌妖しく点る骨の影
身を晒す飛蝗の羽化は憚らず
神の留守出雲駅伝神ばかり

捨て去りし古里は今お茶の花
泥鰌掘る心も変はる世も変はる
子規の里明治の雪もこんな雪

.....

弁慶氏発谿聲氏黙諾に始まった句会は、辞書と歳時記を離せぬ生涯
学習の一つになった。投句も選句も迷うことが多い。主宰、会員の評、
アドバイスには納得するばかりである。句会の度、療養中の先生の選
や評の如何に一人思いを馳せる。スポーツ、科学、経済、未開世界の
感動も対象に詠みたい。町の子供達と俳句で遊びたい。会の存続には、
高齢化もあり自在性ある運営が基準となるう。